

## バドミントン部創部 50 周年を迎えて



専修大学体育会バドミントン部

部長 渡辺英次

専修大学バドミントン部 OB・OG の皆様、併せて当部に関わり、支えていただきました多くの皆様におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

このたび専修大学バドミントン部は創部 50 周年を迎えました。皆様とこの日をお祝いできます事を幸せに感じております。歴代の部長を務められました先生方、34 年の長きにわたり監督を務められました成瀬監督はじめ指導者の方々のご尽力に深く感謝いたしたく存じます。これまでの歴史の中では女子チームは昭和 55 年春に初めて 1 部昇格し 56 年春から現在までの 30 年の長きにわたって、そのほとんどを 1 部リーグを主戦場に戦ってまいりました。男子チームは昭和 60 年代に 1 部リーグ入りし、その後部員数減少によって休部を余儀なくされましたが、バドミントンを愛する有志によってその活動が再開され、現在は 3 部リーグの上位に位置しております。現役諸君は悲願の関東リーグ・インカレ優勝をつかみ取るために日々トレーニングを積んでおります。当部からナショナルフラッグを背負う選手が出る日もそう遠くないと確信しており、全力で支援していきたいと考えております。

また、この記念誌を契機にいたしまして次の半世紀がより輝かしいものとなるよう、部員、OB・OG の「オール専修」の力を一致団結して新たな一步を踏み出していきたいと思っております。皆様には引き続きご支援いただきたくお願い申し上げます。

ここに創部 50 周年を祝い、1 年 1 年の積み重ねの先にある創部 100 周年に向けて限らない発展を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

戻る

## バドミントン部女子監督

野尻憲介

専修大学体育会バドミントン部の創立50周年は、東日本大震災という衝撃的な年と重なり、記憶に強く長刻まれることとなりこの行事も大学関係者並びにOB、OGの皆様方の協力支援のもとに開催のはこびとなり、ここに厚く御礼申し上げます。お亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈りいたすとともに、被災された皆様には衷心よりお見舞い申し上げます。

思えばこの半世紀の間に、専修大学の発展はめざましく1996年の文学部、その後ネットワーク情報学部、人間科学部7学部17学科と充実し又施設面におきましても、第一体育館・総合体育館・図書館や校舎では5、6、7、8、9、10、11号館の新設増設と数多くありましたが、当バドミントン部も女子が昭和55年に念願の関東学生リーグ一部昇格、男子も昭和59年に一部昇格を果たし、女子はその後31年間関東リーグの一部校を維持し続け伝統校として、全国大会の東日本大会や全日本学生選手権においての出場はもちろんのこと、世界学生選手権・ユニバシア・ドの代表選手として選出され活躍しています。今から10年前、当時の監督成瀬は、創部40周年の節目にあたってのメッセージの中で、41年目以降の当部を取り巻く環境・課題について次のように述べています。曰く、今後当部は学生界トップクラスでの成績が問われる躍進期に入る。曰く、練習の量・質を高め、目標は関東リーグ・全日本学生選手権団体の優勝であり今後はOB・OGの応援及び支援体制にある。曰く、当部の発展は『部員の充実』にある、・・・・と。

あれから10年を経過します。メッセージ中の優勝こそのがしましたが、その他は着々と進行しつつあります。今振り返ればこの50年間にバドミントン部という一つの<絆>で結ばれた250余名のOB・OGが専修大学を卒業し社会で活躍していますが、250名それぞれの人の数だけ語りつがれた逸話があります。紙面の都合によりその一部のみを紹介いたします。

創部まもない時代から20年余りの間は、練習コート確保が大きな課題であり第一体育館での空き時間を利用した朝練習、昼休み時間の練習、放課後の多摩川へのランニングやトレーニングは勿論のこと、他大学や近隣の体育館に練習の場を求め、何時かは『学生界のトップに立つ』という夢と高い志を持ち、今も現役の部員に当時の先輩方々の熱い思いと厳しい環境のなかで苦労した状況が語り引き継がれています。現在は第一体育館を主な練習場として年間1,200時間位の練習と春・夏の合宿、他大学や実業団チームとの練習試合を重ね学生界、日本のナンバーワンの高い目標の実現をめざして練習に取り組んでおります。この50年間、我バドミントン部がまがりなりにも成長を続けてこられましたことは、日高学長、加藤体育部長をはじめとした専修大学関係者の皆様、バドミントン部歴代の部長様、部員の出身高等学校の先生方々や関係者の皆様、各部員のご父兄の皆様、OB・OGの皆様のお蔭に外なりません。

今までのご支援を頂いた感謝の気持ちを忘れず恩を胸に刻み、ここから新たな一步を踏み出します。今後とも倍旧のご指導ご支援を心からお願い申し上げます。

戻る

## バドミントン部男子監督

小塩信

『カラコローン』カウベルの音が響いて、理髪店のドアを開いた。伴野も私も五厘刈りになったばかりの頭を掻きながら外に出た。三年の春季リーグ、対筑波大戦、相手エースダブルスに当たり、善戦はしたものの負け試合となった。直後、成瀬監督から「反省しろ」という理由で、小豆沢体育館近くの理髪店で坊主頭になり、そのまま又、体育館に戻るところだった。当時は（昭和 56 年から昭和 59 年）、1 年生は坊主、2 年生はスポーツ刈り、3、4 年生は自由で、3 年生になるとパーマを掛ける奴が多く、パートナーの伴野もその試合の数日前にパーマをかけたばかりで、パーマ液でついた 3 本の線が坊主頭にアデイドスのマークのように浮き出していた。あの時、何故私達のダブルスだけが坊主頭になったのか、他の学生には、何もなかったと記憶している。それから一年後、昭和 59 年春季リーグ戦で二部優勝し、入替え戦で慶応大に五対二で勝ち、創部以来初めて、一部昇格することとなった。

私は現在、男子部員と上位リーグへの昇格を目指しているが、日頃から当時の想いも変わらずに、「専修に来て良かった」自分のいた場所、経験があとになっても活かされていると信じている。現在の学生にも、是非、「専修に来て良かった」と思えるように過ごしてほしいし、そのために私達が出来ることをバックアップしていきたいと考えている。

末筆ですが、記念誌作成にあたり、OB 会長の武田先輩、成瀬前監督はじめ、多くの方々、また、編集に携わって頂いた、江村君ほかOB・OGの方々に尽力を頂き、誠にありがとうございました。今後も微力ながら、専修大学体育会バドミントン部ならびにOB会発展のため、努力して参りますので、宜しく願い申し上げます。

戻る